

ぽむ・ぽむ通信

№. **56**

生協の組合員と日本ユニセフ協会を結ぶネットワーク通信「ぽむぽむ通信」は、生協組合員のボランティアグループで発行・編集をしています。生協のユニセフ支援活動に積極的にご活用ください。



《 2012年 ネパール・スタディツアー 中津清次氏 撮影 》

～ネパール・スタディツアーから～

ぽむ・ぽむ通信 56号

目次

◇アフリカ干ばつ緊急募金 ～「アフリカの ^つ 角」地域、サヘル地域の現状～	1
◇知っとこ。ユニセフ 公平性③ ～ミレニアム開発目標達成をめざして～	4
◇世界の子どもたちは今 募金で出来る支援	6
◇ネパール・スタディツアー参加者の報告	
＊みやぎ生協 ＊コープこうべ ＊全国大学生協連	7
＊日本生協連	13
◇生協のユニセフ支援活動	19
＊ 市民生協やまなし ＊コープぎふ	
◇トピックス	21
＊ 2012年度 第30回ユニセフ・ラブウォーク中央大会 実施報告	
＊ 2011年度ユニセフ募金集計報告	

ぽむぽむ通信 活用のすすめ

- ・ すべてのページをコピーしなくても、「知っとこ。ユニセフ」や「世界の子どもたちは今」を集めて、資料として活用いただけます。
- ・ ユニセフのつどいやユニセフ展、学習会の際に、資料としてご活用いただけます。
- ・ 店舗の募金箱の近くに置いて、生協のユニセフ活動を紹介する際にご活用いただけます。
- ・ 生協の管理している文化センターなど、共用施設の雑誌コーナーなどにもご活用いただけます。
- ・ 写真のコンテンツも充実しているので、カラーコピーでの使用をおすすめします。



アフリカ干ばつ緊急募金

～「アフリカの^{つの}角」地域、サヘル地域の現状～



(C)UNICEF/Chad/2012/CTidey

深刻な栄養不良の子どもを
膝にかかえる女性

2011 年、「アフリカの^{つの}角」地域と呼ばれるアフリカ東部を、過去 60 年で最悪の干ばつが襲い、660 万人以上の子どもたちが栄養不良や劣悪な環境に苦しみ、いまでも多くの命が奪われています。現在、干ばつの猛威はサヘル地域へ拡大、更に 100 万人以上の子どもたちが、命の危機にさらされようとしています。



日本ユニセフ協会 HP より



「アフリカの^{つの}角」地域

～前進があるものの前途多難な現状続く～



2011 年、「アフリカの^{つの}角」地域（ソマリア、エチオピア、ケニア、ジブチ）で展開しているユニセフの大規模な支援活動は、飢餓の拡大を食い止め、何万人もの命を救いました。

ユニセフ最新の報告書（2012 年 3 月発行）では、以下の項目を含む、ユニセフの 2011 年下半期の大規模な人道支援の詳細が記述されています。

- ・ 命を救う緊急支援物資 6 万トン以上の空路、陸路、回路による輸送
- ・ 35 万人近くの重度の栄養不良の子どもたちの治療
- ・ 790 万人の子どもたちへのはしかの予防接種
- ・ 320 万人に安全な飲料水を提供
- ・ 20 万人以上の子どもたちへの「子どもに優しい空間」の設置と安全な環境整備の促進



©UNICEF/NYHQ2012-0243/Asselin

ブルキナファソにある保健センターで
栄養治療食を食べる、生後7ヶ月の
サアマトウ・バンゴウちゃん

支援者のみなさま、パートナー団体のみなさまの支援によって、ユニセフは飢餓状態であったソマリア6地域で、緊急事態レベルの格下げに貢献し、ケニア・トゥルカナ地方の急性栄養不良の割合が3分の1に低下、エチオピアの子どもたちの急性栄養不良率や5歳未満児死亡率の画期的な改善に貢献しました。



しかし、報告書はまた、現地の状況は悪化しており、これまでの暫定的な前進を脅かしていると警鐘を鳴らしています。「アフリカの角^{つの}」地域では、今なお800万人以上の人々が緊急支援を必要としています。ソマリアでは、人口の3分の1近くに及ぶ251万人もの人々が、緊急支援が必要な深刻な状況に置かれています。その中の32万3,000人以上は、重度の栄養不良に苦しむ子どもたちです。ケニア東北部のダダーブ難民キャンプでは約46万3,000人、エチオピアのドロ・アド難民キャンプでは14万2,000人、ジブチのアリ・アデー難民キャンプでは2万2,000人ものソマリアからの避難民が、さらにソマリア国内で避難している国内避難民135万人が、継続支援を必要としています。



©UNICEF/NYHQ2011-1344/Kate Holt

ケニアのダダーブにある避難民キャンプに辿り着き、
深刻な栄養不良に陥っている子どもの診察を受けるために
順番を待つ女性たち



サヘル地域 ～被害は数百万人にも



干ばつや食糧価格の高騰により、子どもたちをはじめとする多くの人々が深刻な栄養不良で命の危機に瀕しているソマリアをはじめとする「アフリカの^つ角」地域。その状況が、サヘル地域（ブルキナファソ、カメルーン、チャド、モーリタニア、ニジェール、ナイジェリア北部、セネガル北部に広がる地域）でも広がりつつあり、1,500 万を超える人々が干ばつの危機に直接さらされています。この地域に住む人々は、もともと様々な困難に耐えてきた人々です。しかし、度重なる緊急事態に、その抵抗力も弱まりつつあります。サヘル一帯は、2005 年から 2010 年にかけて干ばつに見舞われ、多くの家庭が主な収入源であった家畜を売り、現金収入を得る仕事をさせるために子どもを学校から連れ出し、さらに借金を抱えながら、わずかな食べ物だけで日々をすごしています。

ユニセフは、重度の栄養不良で救命措置を必要としている 100 万人の 5 歳未満の子どもたちに治療を目的とした給食を与えるためには、約 1 億 2 千万ドルの資金が必要です。しかしながら、これまでに確保できた資金は、その 32% に過ぎません。

絶望的な環境の中でも、子どもたちは必死に生きようとしています。ユニセフは引き続き、食糧確保が難しい世帯への支援を行うため、国際社会の支援を要請しています。



©UNICEF/NYHQ2012-0194/Holt

ユニセフが支援する食餌センターで保健員が子どもの上腕囲を測り、栄養状態の調査を行っている（チャド）

（参考資料：日本ユニセフ協会ホームページ「アフリカ干ばつ緊急募金第 37 報、第 56 報、第 60 報」より）
http://www.unicef.or.jp/kinkyu/africa_drought/

◆アフリカ干ばつ緊急募金◆

郵便局（ゆうちょ銀行）

振替口座：00190-5-31000

口座名義：公益財団法人日本ユニセフ協会

* 通信欄に「アフリカ干ばつ」とご明記ください。

* 送金手数料は免除されます。

知りたい?

知っここ。ユニセフ

公平性 ③

～ミレニアム開発目標達成をめざして～

途上国の国の中でも最貧層のコミュニティー、もっとも弱い立場の子どもたちに重点的に支援を行うことで、子どもと母親の開発に関する主要分野において顕著な改善が見られた例を紹介します。

エクイティー（公平性）戦略とその成果



最も貧しい人々に焦点を当てることにより、保健における公平性を向上させたラテンアメリカにおける最近の成功については良く知られています。**ブラジル**と**メキシコ**

は、保健ケアの利用料の引き下げ、または撤廃し、最も貧しく最も疎外された特定のコミュニティーや地域に向けた保健サービスの提供を拡大しました。また、条件付きで現金を給付するなど包括的なアプローチを通じて、不公平の是正に向けて大きな成功を遂げました。成功の背景には、社会経済的な格差と地域的格差の是正に向けた持続的な政府の強い意志がありました。



(c)UNICEF/NYHQ2006-1355/Claudio Versiani (c)UNICEF/NYHQ2004-0572/Mauricio Ramos



天然資源が不足している**ヨルダン**は、1946 年の独立以後、基礎教育を、特に農村部に重点を置いて拡充することにより知識集約型産業を築くという決定をくだしました。現在、同国の初頭学校就学率は男女ともに実質 99% であり、男女とも 85%以上が中等教育に進んでいます。



(c)UNICEF/MENA01334/Giacomo Pirozzi



ガーナは、1990 年代の初めに導入された全面的な水改革プログラムによって、改善された水源へのアクセスにおける都市部と農村部との間の格差を縮小しました。このプログラムは地方の村を対象としたもので、コミュニティーと地元政府の協力関係により水源が管理されています。



(c)UNICEF/NYHQ2007-0957/Olivier Asselin



スリランカの事例は最も説得力のあるもののうちの一つです。1948 年に独立を

勝ち取って以来、歴代の政府は特に農村部の母子保健ケアに重点を置き、基礎的サービスの無償での提供と、コミュニティを基盤とした制度を支援し続けました。公平性に重点をおいたアプローチへの投資により、子どもと母親の保健や基礎的な保健ケアへのアクセスに関して、スリランカは南アジアで最高の指標を記録したのです。



(c)UNICEF/NYHQ2009-0736/Suzanne Davey



トルクメニスタンでは、1990 年代に開始された一連の改革により、女子のためのより良い保健習慣が推進され、妊娠期間中と出産後最長 1 年間の産科サービスが無料で提供されるようになりました。この改革によって、この国のほぼすべての女性が出産前ケアや専門家による分娩時のケアが利用できるようになり、産科サービスへのアクセスにおける格差を実質的に解消することができました。



(c)UNICEF/NYHQ1997-0532/Maggie Murray-Lee

すべての子どもに「いのちを守る方法」を届けるために、
ユニセフは最も貧しい地域や 最も取り残された地域、
また支援の届きにくい地に向けた活動を最優先させます。



世界の子どもたちは今

募金で出来る支援



1円



ビタミンA欠乏症やはしかによる合併症を予防・治療するための、ビタミンAカプセル1錠

7円



急性の下痢による脱水症から子どもの命を守る粉。
[経口補水塩=ORS] 1袋。
安全な水と混ぜて飲む。

12円



ポリオ経口ワクチン1回分。

48円

1錠で4〜5リットルの水を浄化できる浄水剤50錠。



80円



HIV/エイズ簡易診断キット、1キット。生後18カ月以上の乳幼児から大人まで使用可能。

80円



子ども2人分のえんぴつとノート。

1人分= えんぴつ1本
ノート1冊



すごい！
こんなにあるんだね。
じゃあ、友だちやクラスの皆が協力してくれたら、
もっともっと色々な支援ができるんだ!!



そうなの、これ以外にも
たくさんあるのよ。
調べてみてね!

240円



使い捨ての注射器 (5ml) 50本。
これにより、50人の子ども
たちが安全に予防接種が受け
られる。

240円

子どもを寒さから
守る、大きめの
フリース製毛布
1枚。



800円

子ども10人分の
スケッチブックと
クレヨンセット
(8色入り)



1600円



なわとびの縄
60本。

480円

10リットルの水を運搬・
貯水することができる、
折りたたみ式の
貯水容器3つ。



480円



マラリアを運ぶ蚊から
家族を守るための蚊帳 (かや)
2張。(殺虫剤処理済み)

1200円



ワクチン用保冷箱
1個 (2リットル)

1200円

緊急時に栄養不良の
子供に食べさせる
高カロリービスケット
20箱。



こちらをご覧ください

※2012年5月現在の価格です。

http://www.unicef.or.jp/cooperate/coop_support.html



ネパール・スタディツアー参加者の報告

北海道、東北、九州の各生協が取り組んでいる、ユニセフ ネパール指定募金。
2012年2月に、現地のスタディツアーを実施しました。ユニセフによる支援の様子を
視察した参加者のレポートをご紹介します。

みやぎ生協 ネパール・スタディツアーに参加して

■参加の動機■

小学生の時に図書館で借りたある本が、「ネパールへ医療支援に行ったお医者様と、その方の養女になったネパールの孤児の女の子の話」でした。その時からずっとネパールという国は不思議な国旗とともに心の中に残っていました。また、ユニセフの活動を初めて知ったのは、オードリー・ヘップバーンが親善大使をしていたころのドキュメンタリーでした。アフリカを訪れたオードリーの手に抱かれている、赤ちゃんの細い手足に衝撃を受けた覚えがあります。

その後、みやぎ生協の委員会に参加し、ユニセフの活動を支援していること、ネパールの指定募金が始まったことを知りました。当時の理事から水と塩と砂糖で作る「経口補水塩」の作り方を教えていただき、委員会で実際に作りながらメンバー（組合員）に説明したのを記憶しています。今回ユニセフ・スタディツアーのお話をいただき、ネパールを実際に自分の目で見る機会を頂けたことをとても感謝しています。

■参加しての感想■



©日本ユニセフ協会

パラリーガル委員会の女性たち

自信を持って一人ひとり自己紹介してくれました

今回一番印象に残っているのは、人前で正々堂々と自分の意見を発表する女性と子ども達の姿です。自信に満ちた彼女らの姿を見ていると、ユニセフのDACAW（「地域主体の子どもと女性のためのプログラム」）がなければ、このような姿を見ることができなかったのだと思います。支援の大切さを実感しました。

青少年グループ（Jamarko）との交流では、当初「低カーストの子どもと一緒に食事をするとうるしの怒りに触れる」と考えていた高カーストの子どもが、活動の中で低カーストの子どもと一緒に食事をし、それ以降は一緒に食事をしたり遊んだりできるようになったという話を聞くことができました。

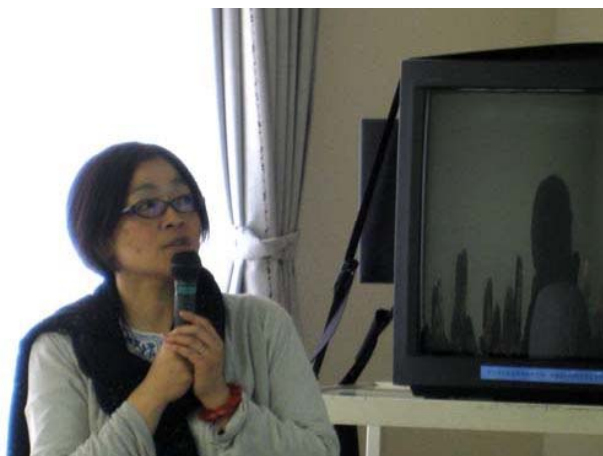
また、働く子どものネットワーク委員会（Nishma Nepal）との交流では、都市部の労働児童に対しての学校外教育プログラムによって、読み書き・計算能力の講習を受けることができたようになった話を聞くことができ、教育の大切さを改めて感じました。子どもたちが大きくなるころには、カースト制度がなくなって欲しいと願ってやみません。

パラリーガル委員会との交流の中でも興味深いお話を聞くことができました。女性の問題を女性たち自身で解決していくという活動を通して、皆自信を持てるようになり、深くかぶっていたベールも顔が見えるくらいになったそうです。男子は大事にされ、女子は虐げられるというネパールの風習も委員会の活動を通して変化していくのではと思いました。

最後に、コープこうべから参加していた六車（むぐるま）さんと小学生の時に会ったネパールの本のことを話していたところ、彼女もその本を読んでいたことがわかり、さらに、お医者様が神戸大学の故岩村教授で、養女のマヤさんは元気で活躍されているとお聞きし、胸がいっぱいになりました。

■報告会の様子■

みやぎ生協では、4月27日に「第1回報告のつどい」を開催しました。まず、ユニセフの活動を、DVD「ユニセフと地球のともだち」で紹介しました。



現地の報告をする千葉さん

その後、パワーポイントを使いスタディツアーの報告を行いました。前半は私が、後半は一緒に参加したユニセフボランティアの千葉きえ子さんが報告しました。

参加者からは「私たちのユニセフ募金がどのように使われているのかがよくわかった」「カースト制度の差別が残る地域でのユニセフ活動が、地域の子どもたちや女性の生活の、また地域社会全体の改善につながっている実態をよく理解することができた。長期的な支援がまだまだ必要なこともわかったので、今後もユニセフへの支援に協力していきたい」などの感想が寄せられました。

当日はネパール人のお客さんも招き、お国自慢をしていただきました。アルンさんはチトワン出身で、息子さんの病気治療のため5年前に来日したそうです。サブタリ郡はお父様の実家があるそうで、パワーポイントの写真を見て「懐かしい」と言ってくれました。

アルンさんへの質問コーナーで、最後に手を上げられた男性の方が、突然流暢なネパール語で話しかけたのには驚きました。この方は、2年間ネパールに住んでいたことがあるそうです。会場では、マサラティーと現地スタッフのルパさんからお土産にいただいたラブシキャンディーが好評でした。



ネパールの話をするアルンさん

地域代表理事になって丸2年が経ちますが、今回のネパール・スタディツアーに参加して、地域での「ハンド・イン・ハンド」や「牛乳パック回収の収益金」など地道な募金活動の大切さを改めて実感しました。今後も報告会などを通して、メンバー（組合員）に伝えていくことができればと思っています。

《みやぎ生協 地域代表理事 千葉博恵》

コープこうべ ～ 子どもと女性の未来のために ～

1. ツアー参加にあたり考えたこと

ネパールの自然と人々の暮らしの中で、ユニセフの活動がどのような意味を持っているのか学びたいと思いました。

2. ネパールという国（国名：ネパール連邦民主共和国）

- 歴史…1990年に民主化後も武力衝突があり、2008年により選挙が行われました。
- 地理…中国のチベット自治区とインドに囲まれた内陸国で、東西に長い国土です。
標高約 100m～8800mと 8000mを超える標高差があり、亜熱帯から寒帯まで多彩な気候の国です。大きくは南部の平原地帯、中部の丘陵地帯、北部の山岳地帯に分けられます。国土は約 14 万 7000k m²と、北海道の 1.8 倍です。
- 民族と言語・宗教…100を超える民族と 90を超える言語があり、2008年現在、人口は約 2900 万人と推計されています。公用語はネパール語ですが、英語も多用されています。宗教は、元・国教であるヒンドゥー教が約 8 割、仏教とイスラム教が約 15%です。カースト制があり、社会制度や慣習の中に、差別は根強く残っています。
- 暮らし…主な産業は農業と観光です。
- 子どもと女性…5歳未満児の死亡率は 1000 人当たり 55 人（2007 年推計 日本では 4 人）、低体重など栄養不良の子どもの割合が 40%を超え、妊産婦死亡率も出生 10 万人あたり 280 人（日本では 8 人）、出生届のない子どもが 2/3 等と多くの課題を抱えています。
- ネパールに対するユニセフの活動…ユニセフはネパールで約 40 年間の支援活動を行っています。時代ごとに特徴があり、ハード面の整備からソフト面の整備へ、モノの提供から人づくりへと移り変わっていきました。

3. 今回の視察先でのユニセフの活動事例

今回訪問したのは、

- 低カーストの集落にある、就学前の幼児教育センターや住民組織
- “子どもにやさしい”（教育方法や教材に工夫のある）小学校
- 後発開発地域の住民組織と非公式教育（学校に通っていない女の子のための識字教室）
- 地域活動を行う青少年グループや働く子どものネットワーク
- 地域の課題解決を行うための女性グループや保健所兼出産センターなど 計 10 か所でした。

その中で、特に印象に残ったことは以下の点です。

- ① **女性の変化**：低カーストの集落の女性コミュニティーへの支援は、乳幼児の予防接種や子ども就学などを通じて集落の生活環境を改善することだけが目標ではないようです。コミュニティーの中には、ファシリテーター・モビライザーと呼ばれる女性たちがいて、どの家の子どものが学校に行っていないか、どの子どもは予防接種がまだか…といった課題をきちんと自分たちで把握し、原因を考えて対応していくのです。



最も貧しい低カーストの集落 けれども女性たちの意識も行動も変わってきました

「ユニセフの支援活動を通じて、女性の皆さん自身が、何か変わったことはありますか？」と尋ねてみました。すると1人の女性が「これまで人前で話すこともなかったのに、自分で考え、声をあげ、話し合うようになった」と答えてくださいました。この変化はとても素晴らしい、そして大切なことだと感じました。

- ② **成功事例の展開**：支援活動はどこの地域にも公平に、と考えがちですが、あえて特定の地域コミュニティに集中的に支援活動を行い、その成功事例を近隣地域に広げていくという手法も、印象的でした。はっきりと成果が見えることで、次の展開につなげやすいと思いました。

- ③ **子どもたちの変化**：訪問した青少年グループの子どもたちも、自分たちで課題を見つけ、話し合い、ゲームや寸劇を通じて、課題発見・課題解決に取り組んでいました。

また、働く子どものネットワークでは、働きながら識字教室でともに学び、自分たちを取りまく課題を仲間と共有化、改善のために力をあわせて行動していました。使用人が識字教室へ通うことを許さない雇い主のところへ子どもたちが集団で交渉に行き、通学を認めさせるなど、具体的な行動が、生活の改善に直結していました。



働く子どもの識字教室&ネットワークで。壁には目標や現在の状態などをまとめて掲示しています

- ④ **地域自治への参画**：“女性と子どものための住民自治のプログラム”という、かつてユニセフが導入したしくみは、今回視察した地域では“子どもにやさしい地方自治”という、さまざまな



足元の大きなリング状のものをいくつか組み合わせて地中に埋め、トイレを作ります

な階層が地方自治に参画するための国のしくみへと「進化」していました。そこには、地域組織・母親グループ・子どもクラブ・他民族・障がい者・低カースト・貧困層・・・と社会のさまざまな層から住民が参加し、意見を出し合い、それを地方行政に反映させているのです。日本では、市議会にしろ地域の自治会にしろ、子ども代表や障がい者代表・他民族代表が参画するなどというしくみは聞いたことがありません。ある意味で日本より進んだしくみなのではないかと本当に驚きました。

4. ツアーを終えて

- ① 地理的・歴史的・社会的要因により開発が妨げられてきたと思われるネパールですが、どの訪問先でも、子どもたち・女性たちはとても前向きでした。「地域のくらしがよくなるように」「私たちみんなで問題を見つけ、考え、解決していきたい」と願うその意欲、熱意・・・。生協にとって大切なものを逆に教えていただきましたし、生協の「よりよい地域づくり」という考え方は、世界に通用するのだと、改めて実感しました。

そして「参画できる」ことの大切さです。選挙に行く、PTAや地域の自治会に参加する・・・、日本では義務のように思いがちなことが、実は大切な「個人」の権利なのだと再認識しました。

- ② ネパールは、さまざまな指標から見ると日本よりはるかに後発国です。しかし、その不利な状況を逆に、強みに変える底力を持っているように感じました。大勢の日本人の前で、堂々と活動紹介をしてくれた“開発の遅れた地域”のお母さんたちや、学校に行けずに働いている子どもたち。彼らのもつ“人間力”にとっても魅力を感じましたし、尊敬します。いつかまたぜひネパールを訪れ、さらにパワーアップした彼らに会いたい！と思いつつ帰国の途につきました。



お母さんパワーも万国共通？言葉は通じなくても通じ合えるのです・・・！



「日本にも女性に対する差別はありますか？」
という鋭い質問がとんできました！



子どもたちの服装は万国共通？私たちについて歩きながら、
いろいろな言葉を教えてくれました



やはりいました！ネパールの野良牛
なぜかごみの吹き溜まりのようなところで寝ています

《 コープこうべ 組織政策推進室 六車恵美子 》

ユニセフのスタディツアーへは、毎年、全国大学生協連から常勤学生委員を派遣しています。ユニセフ支援活動の今後の可能性を考えるべく、今年参加させていただくことにしました。今回、さまざまな場所を訪問し、ネパールでのユニセフによるDACAWプログラムの取組みを視察して感心したことは、地域住民、特に子どもや女性たちが、自分たちの生活の中にある問題を自分たちで発見し、自分たちで解決方法を考え、自分たちの手で解決してよりよい生活を築いていく姿でした。

差別に立ち向かう明るい力



Jamarko のメンバーたち

多くの村落の地域コミュニティでは、子どもたちがその一員として大きな役割を果たしていました。学校や村落の中で「子どもクラブ」を形成して、子どもたちの中に存在するさまざまな問題を自分たちで発見し、解決策を考え、実践をしています。その中でも、ある村落の”Jamarko Initiative”という青少年グループの取組みが印象的でした。これは日本の中学・高校生くらいの世代による子ども会のようなもので、子どもたちの中でのさまざまな問題をみんなで話し合いながら解決していくという活動です。

子ども同士でロールプレイなどのゲームをしながら、自分たちの中にある問題を発見していきます。彼らの抱える問題の中で特に目立つのは、カーストによるものです。低カーストの子どもへの差別的な扱いや女子の早婚の問題などがあり、それらが良くないこと、改善すべきであることを、子どもたち自身で気づき解決しています。解決に向けた取組みも子どもらしく、劇などを通じて楽しく啓発活動が行われています。この取組みによって子どもの社会参加が促されていること、また、村落にある問題を子どもたち自身で解決していく過程で、子どもたちの想いや力が、大人たちにも良い影響を与えていることに感心しました。

ソフト面での支援の重要性

私にとって、これまでユニセフの取組みというとどちらかといえば、物資支援などハード面での支援のイメージの方が強かったのが実状です。しかし、今回ネパールのDACAWとCFLG（「子どもに優しい地方自治」）のプログラムを視察して、住民や自治体、そして政府が自立して発展していくためには、ハード面の支援もちろん大切ですが、教育プログラムなどのソフト面での支援が、より重要であることを知ることができました。

大学生として関わる国際支援

東日本大震災の発生後、被災地の復興に向けてさまざまな支援が行われており、今後も更なる支援が必要です。この状況の中では、大学生が国際貢献について考え実践する機会が減ってしまうことも考えられます。しかし、震災復興のため、日本がユニセフを含め国際社会から大きな支援を受けていること、また、これまで行われてきた国際支援を継続していくことの必要性を考えると、やはり少しでも国際貢献のため自分にできることを考えていきたいと強く思います。

今回視察メンバーとの交流を通して、日本のユニセフ活動における生活協同組合の貢献を垣間見ることができました。かつては、大学生協も全国で活発な募金活動を展開していました。しかし、現在ではその動きは失速気味です。組合員が世界の子どもたちの現状を知ることのできる機会を持ち、それに対する支援としてのユニセフ募金の取組みを再加速させていきたいです。今回の視察の体験を、周りの学生に少しでも多く伝え、ユニセフ募金活動の再加速のきっかけとしていきたいと思います。

《 全国大学生協連 副学生委員長 倉元祥伍 》

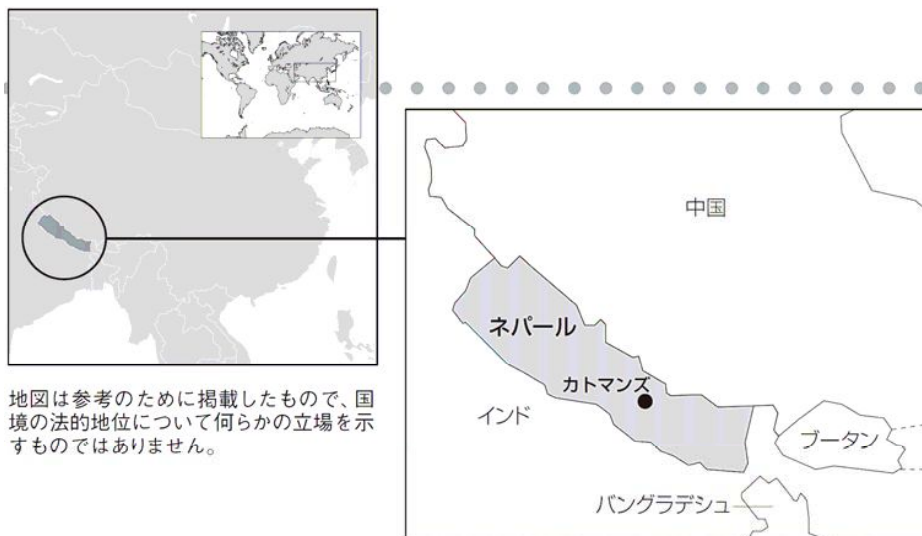
ネパール・スタディツアー報告 ～日本生協連～

北海道、東北、九州の各生協では、ユニセフのネパール指定募金に取り組んでいます。今回のスタディツアーでは、サプタリ郡などネパール東部を訪れて、日本の生協の支援によって「地域主体の子どもと女性のためのプログラム」や「子どもに優しい地方自治」などが行われている現場を視察しました。概要は以下のとおりです。なお、地名や組織名はできる限りカタカナ表記にしましたが、正確なカタカナ表記がわからないものは一部英文表記を残しています。

1. 日 程 2012 年 2 月 18 日(土)～26 日(日)

2. 参加者(敬称略、順不同)

みやぎ生活協同組合	千葉博恵
生活協同組合コープこうべ	六車恵美子
全国大学生生活協同組合連合会	倉元祥伍
東京都民共済生活協同組合	中津清次
北海道ユニセフ協会	国兼未和
宮城県ユニセフ協会	千葉きえ子
岐阜県ユニセフ協会	紅谷昭代
熊本県ユニセフ協会	上村雅子
宮崎県ユニセフ協会	恒吉久美子
日本生活協同組合連合会	中村良光
日本ユニセフ協会	千寿満城
日本ユニセフ協会	石尾匠
以上 12 名	



(地図資料: 日本ユニセフ協会より)



3. 主な視察先とユニセフ活動の概要

(1) ユニセフ・ネパール事務所とネパール東部地域事務所

〈2月20・21日〉

活動現場の視察に先立ってカトマンズのユニセフ・ネパール事務所をまず訪問し、ネパール事務所全体の活動(子どもの保護、広報とアドボカシー、乳幼児ケア、教育、HIV/エイズ、水と衛生)、「地域主体の子どもと女性のためのプログラム」、「子どもに優しい地方自治」などについての概要説明を受けました。その後ネパール東部の



©日本ユニセフ協会
ユニセフ・ネパール事務所前にて

ビラトナガル市に移動し、翌日はユニセフ・ネパール東部地域事務所を訪問しました。ネパールに3つある地域事務所のひとつで、現地の活動状況を把握し、最も困難な状況にある子どもたちに支援の手を渡らせるため活動しています。この事務所では、日本の生協の支援で行われているユニセフの活動について説明を受けました。ネパールでは郡の下での行政区分として村落開発委員会があり、ユニセフは村落開発委員会レベルでファシリテーター(調整員)を選んでいます。ファシリテーターを試験で選ぶ際には、就学年数など資格を緩和して低カーストの人たちへの優遇措置を設けています。さらに下の行政区分である区・集落レベルにはモビライザー(推進員)を置き、ファシリテーターやモビライザーが中心になって各地域で必要なものを話し合い、地域のニーズを村落開発委員会に伝えています。また、子どもクラブや女性団体なども地域で活動を行い、パラリーガル委員会(ドメスティックバイオレンスなどの問題を女性たちで解決する組織)を通して問題提起を始めています。

(2) ラヤプール村落開発委員会 Baunidevi 早期幼児開発センター 〈2月21日〉

早期幼児開発センターは、子どもたちの潜在的な能力を伸ばす基礎作りに重要な役割を果たしています。

Baunidevi 早期幼児開発センターは低カーストのコミュニティー内にあり、貧しく最も不利な状況に置かれた子どもたち 22 名（男子 9 名、女子 13 名）を含む 3～5 歳の就学前の子どもたちが、平日は毎日 4～5 時間とともに過ごし、訓練を受けたファシリテーターのもとで簡単な計算などを勉強しています。ファシリテーターは、「ダリッド」と呼ばれる低カーストのコミュニティー出身の女性で、教育を受けていない親にも必要な知識を伝えていく役割を果たしています。



©日本ユニセフ協会

(3) ブデスワリ小学校 <2 月 21 日>

サブタリ郡では 2006 年に「子どもに優しい学校」の取り組みが始まり、2011 年には 87 校にまで増加しました。今回訪問したブデスワリ小学校は、306 世帯 388 人の子どもたちが通い、6 人の教員（女性 2 人、男性 4 人）が授業を行っています。低学年の子どもたちへの教育にも力を入れていて、子どもにも使えるよう黒板が教室の低い位置に配置されています。ユニセフの支援で教員への研修が行われ、研修を受けた先生たちのもとで、子どもたちは元気に参加型の学習を行っていました。

子どもクラブのメンバーに案内されたトイレは男女別で、清潔な手洗い場が設置されていました。

Baunidevi 早期幼児開発センターの子どもたち



©日本ユニセフ協会

子ども中心・遊び中心の授業風景

(4) ラヤプール村落開発委員会・地区 3 低カーストのコミュニティー組織 <2 月 21 日>

ラクスマ・コミュニティー組織は女性が主なメンバーでコミュニティー内の地図作成、モビライザーへの能力開発、コミュニティー組織メンバーへの啓発活動（早期幼児開発、出生登録、予防接種、ヨード添加塩、鉄分錠剤、妊娠中の寄生虫駆除、教育の重要性、公衆衛生などについて）、3 歳以下の子どもへの月例発育観察などを行っています。

村の子どもたちの人数、予防接種を受けた子どもの数、学校へ通っている子どもの数、子どもたちの身長・体重などを 3 ヶ月ごとに記録することで、問題を認識し(Assessment)、分析し(Analysis)、行動を起こす(Action)、3A プロセスを実践しています。



©日本ユニセフ協会

コミュニティー内の地図。問題を可視化する

(5) サブタリ郡ナルゴ村落開発委員会 <2 月 22 日>

ナルゴ村落開発委員会はインド国境から 2km にあり、サブタリ郡でも南部に位置しています。

①地区市民フォーラム

訪問した地区はかつては最も開発が遅れていましたが、ユニセフ主導の「地域主体の子どもと女性のため

のプログラム」から政府主導の「地方行政とコミュニティー開発プログラム」へと切り替えが進んでおり、政府主導のこの新たなプログラムに基づいて地区市民フォーラムが組織されていました。この地区市民フォーラムは25人のメンバーで構成され、ナルゴ村落開発委員会とユニセフの資金で、出生登録の申請支援、予防接種の普及、国民証明書の取得支援、子どもを学校に行かせるための啓発、識字教育、女子のための非公式教育などの活動を行っています。

②女子のための非公式教育

女子のための非公式教育は、ユニセフの支援で2011年7月から開始され、10～18歳の女の子25人が、1日2時間、ネパール語・英語・数学・ライフスキルの勉強をしています。

生徒の1人、バビータさん(13歳)はここで得た知識や情報をもとに、カフェ(お茶屋)を開きました。カフェの経営で1日200～300ルピーの収入を得て、家族5人(障害を持つ両親と妹たち)の生計を支えています。



授業に集まる女の子たち

③トイレの下水管リング作製

コミュニティー内のトイレのリング※作製は、かつては男性の仕事でしたが、低カーストや少数民族の女性たちが技術研修を受け、男性よりも高品質なリングを作っています。農家の手伝いでは1日40ルピーの収入ですが、この下水管リングの作製では1日に250ルピーの収入を得ることができます。

※トイレの下の地中に埋めるリング



トイレの下水管リング製作現場

④青少年グループ「ジャマルコ」

青少年グループ「ジャマルコ」は2011年6月に設立されました。16名の委員会メンバー(男子8人、女子8人)によって運営され、12歳～18歳の一般メンバー360人ほどが所属しています。主な活動として、子どもの能力開発、地域の新生児ケアの研修、リーダーシップ研修、ポリオワクチンの普及のための家庭訪問などを行っています。また、青少年の発育を阻害する問題は、自ら見つけ出して解決を図ります。カースト問題も例外ではありません。「ジャマルコ」に参加することで、子どもたちはカーストの壁を越えて一緒におやつを食べることができるようになり、高カーストの子の意識も変わり始めています。

⑤パラリーガル委員会

パラリーガル委員会は、家庭内暴力、重婚、性的暴力、子どもの出生登録、国民成績証明書など女性に関わる問題を、女性たちで解決していくための組織です。

13歳の女の子が暴行されたケースでは、問題を表沙汰にしたいくない村落開発委員会から示談の要請があり、両親も応じましたが、示



パラリーガル委員会のメンバー

談金は結局支払われず、事件としても時効になってしまいました。パラリーガル委員会として最も不満が残った事件です。一方、女性の家に侵入して勝手に穴を掘っていた男性と帰宅した女性が口論になり、女性が暴力をふるわれたケースでは、パラリーガル委員会から村落開発委員会のメンバーに調停を依頼し、男性から女性に賠償金が支払われました。

(6) サプタリ郡開発委員会 <2月23日>

サプタリ郡開発委員会はラジビラジ市にあります。地域開発オフィサーの説明では、サプタリ郡では「地域主体の子どもと女性のためのプログラム」は2002年に始まり、2011年から「子どもに優しい地方自治」を取り入れて女性と子どものための開発を始めました。

これらの活動によって、地域レベルで女性連盟や子どもクラブなどのネットワークが形成され、活動が行なわれている35の村落開発委員会では女性と子どもの保健・教育・水と衛生状況が改善され、子どもクラブ・青年クラブのメンバーやファシリテーター・モビライザーへの能力開発研修が実施されました。また、「子どもに優しい地方自治」(35村落開発委員会と1市が対象)のために約840万ルピーの予算を組み、子供どもの状況についてのプロフィール作成を支援し、22の出産センターを運営し、45%の妊婦が利用しています。さらに、妊婦と子どもの予防接種率が95%に上がり、就学登録率も90%に上がる(しかも中途退学は少ない)など、活動は成果を上げてきています。

ただし、これらの活動はサプタリ郡のすべての村落開発委員会で実施されている訳ではありません。他の村落開発委員会にも活動を広げるためには、ユニセフのさらなる支援を必要としています。



©日本ユニセフ協会
サプタリ郡開発委員会

(7) カンチャンプール村落開発委員会 <2月23日>

カンチャンプール村落開発委員会では、「野外排泄禁止宣言」をするためのセレモニーが3月1日に予定されており(当時)、すでにセレモニー会場が設営されていました。ユニセフは、カンチャンプール村落開発委員会の女性連盟、スタッフや政党指導者向けに衛生促進に関する能力開発の支援を行っています。子どもたちも、野外排泄が原因となってひき起こされる食事の汚染や疾病の危険について寸劇を披露してくれました。



©日本ユニセフ協会
子どもクラブの活動紹介

(8) Barmajhiya 保健所兼出産センター <2月23日>

Barmajhiyaにある出産センターは1992年準保健所として設立されましたが、2009年に出産センターとなり、3人の助産師が交代制で妊婦検診と新生児ケア、基礎保健サービスを24時間提供しています。周辺の12村落開発委員会の地域住民約5,500人を対象としています。4回の妊婦検診のうち妊娠6か月目には予防接種を行っています。さらに小さい診療所もあり、そこでも年に数回予防接種キャンペーンを行って、BCG、DPT、ポリ

オ、肝炎、はしか、日本脳炎などの基礎的な予防接種を受ける機会を提供しています。

この出産センターができてからは、出産時の死亡はほとんど無くなりました。最初は分娩施設がありませんでしたが、今は分娩室もでき、トイレも併設されています。

助産師をサポートするヘルスボランティアは、コミュニティの母親会のような組織から適任者が選ばれます。ヘルスボランティアが付き添うことで、最も低いカーストの女性たちも安心して出産センターに来ることができます。



©日本ユニセフ協会
出産センター内の分娩室

(9)ネパール人権・環境フォーラム事務所 <2月24日>

ネパールでは山岳地帯に住む子どもたちが、職を求めてビラトナガル市のような都市に送られてきます。多くの子どもたちは、劣悪な労働条件のもとで仕事に従事させられ、学校へ行く機会を奪われてきましたが、ユニセフの支援で開始された都市部の学校外教育プログラムによって、仕事の合間に就学の機会が与えられるようになりました。10ヶ月にわたる基本的な読み書きや計算能力の講習を2年間受けた後、公的な学校に就学する子どももいます。

また、2年間のプログラムが終わった後も定期的に交流の機会をもつ目的で、子どもクラブが結成されました。ユニセフのパートナー団体であるネパール人権・環境フォーラムの指導で、ビラトナガル市でも2001年から子どもクラブが結成され、現在は市内各区に広がっています。

また、同市は2015年までに「子どもに優しい市」になることをめざしており、市の理事会に子どもクラブのメンバー5人が参加しています。市の意思決定に子どもが参加するためのガイドラインがあるのは、ネパールでは同市だけです。

最後に、宮城県ユニセフ協会の千葉きえ子さんが用意された折り紙を、子どもたちと一緒に折って楽しく交流しました。



子どもクラブのメンバー



折り紙を一緒に折って交流しました

帰国後、ツアーに参加したメンバーは、スタディツアーを通して得られた体験をそれぞれの生協やユニセフ道県協会で報告し、ユニセフに対する理解をひろげる活動をすすめています。

以上



市民生協やまなし 「外国コイン募金を届けにユニセフハウスに行こう！」

市民生協やまなしでは、毎年 2 月をボランティア月間として、組合員に外国コインの寄付を呼びかけています。2011 年度は、外国コイン約 8kg と、紙幣 72 枚が集まりました。この募金を、日本ユニセフ協会に直接届けようと、3月 29 日(木)には、「外国コイン募金を届けにユニセフハウスに行こう！」ツアーが開催されました。

■ ユニセフハウスで募金を贈呈

子ども 12 名、大人 8 名の参加者が、バスで東京都港区にあるユニセフハウスを訪れ、組合員を代表して募金を日本ユニセフ協会に贈呈しました。この募金は、ユニセフボランティアの方々によって仕分けされ、海外で現金化された後、ニューヨークにあるユニセフ本部に送られます。



募金贈呈式の様子

■ 世界の子どもたちについて学びました



ユニセフハウスの展示を見学中

その後、ユニセフハウス内を見学し、世界の子どもたちやユニセフの活動について学習しました。小学校低学年の子にとって少し難しいところもありましたが、ボランティアの方の説明に真剣に耳を傾けていました。

ユニセフハウスには
たくさんの学習用展示物があり、
世界の現状について体験しながら
学ぶことができます。



岐阜県ユニセフ協会・コープぎふ 他 「ネパールの子どもたちを知ろう！」

ネパールの文化を身近に感じながら、この国の現状について学ぼうと、2012年3月29日、コープぎふの各務原支所で、春休み親子企画「ネパールの子どもたちを知ろう！」が開催されました。

ネパールで支援活動を行っているNGO『アジア子ども基金』、岐阜県ユニセフ協会、コープぎふが協力し、三者共催で企画したものです。

■ 在日ネパール人 アディカディさんと交流



民族衣装を着たアディカディさん一家

当日は、在日ネパール人のアディカディさん一家6名を招き、子ども12名、大人24名の参加者がいっしょに楽しく交流しました。



■ ネパール料理を手作り

まずは、ネパールのおやつ「サモサ」の作り方を、アディカディさんに教えていただきました。



具を詰めたサモサ
これから揚げます



アディカディさんとサモサを作る

その後、できあがったサモサとチャイを囲みながら、2月のスタディツアーに参加した岐阜県ユニセフ協会の方の報告や「アジア子ども基金」が行っている支援活動の状況などを聞きました。

参加者の感想

ぼくは、貧富の差が大きいことに驚きました。自分の立場と比較すると、小さな子どもが水くみに行ったり、大人で字がかけなかったり読めなかったり、『できないこと』に驚きました。サモサがおいしかったです。女の子の服がかわいかったです。



思い思いのペースで歩いた汗が、ユニセフを通じて開発途上国の子どもたちの健康に役立てられるユニセフ・ラブウォーク。毎年4月の第1日曜日に、港区高輪のユニセフハウスを会場とした中央大会が開催されています。30回目を迎えた今年は、4月1日（日）、『栄養不良から、子どもたちを守ろう』をテーマに、港区の歴史的スポットと坂をめぐるコースで開催されました。



© 日本ユニセフ協会

泉岳寺の前を元気に歩くガールスカウトのみなさん

前日の嵐から一転、朝から雲ひとつない快晴の空の下、参加されたみなさんは、複雑に曲がりながら上る路地を抜け、傾斜のきつい上り坂、転げ落ちてしまいそうな下り坂、緩やかに続く長い坂を歩き、泉岳寺、麻布十番商店街、芝公園、芝浦中央公園をめぐり、額に汗を光らせながら、達成感に満ちた爽やかな笑顔でユニセフハウスへ戻ってきました。



© 日本ユニセフ協会

今年は港区の坂をめぐるコース。汗をかきながら一生懸命のぼりました

桜の開花には少し早かったものの、今大会は、総勢 596 名の参加があり、参加費・募金あわせて 21 万 1200 円が集まりました。この参加費の一部は、ユニセフが世界各地で実施している子どもたちへの栄養支援やお母さんに対する栄養知識の普及などの活動に活用されます。



© 日本ユニセフ協会

前日の嵐から一転、春の陽気に包まれた絶好のウォーキング日和でした

2011年度ユニセフ募金集計報告

全国の生協が組合員に協力を呼びかけて集約された 2011 年度のユニセフ募金は、一般募金、緊急募金、指定募金を合わせて、約 2 億 2 千万円となりました。全国の生協の募金額集計を開始した 1983 年からの累計総額は、約 73 億円となりました。ご協力ありがとうございました。

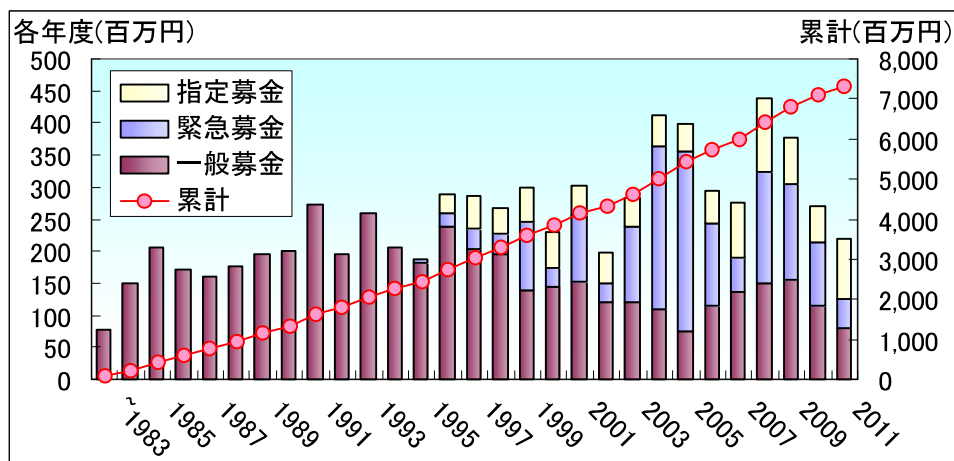
2011 年度の一般募金は約 7,900 万円でした。指定募金は、コープネット事業連合やユーコープ事業連合、日本生協連の牛乳(コープ商品)の購入を通じた募金、地域ごとに取り組まれているラオス、ネパール、モルディブ、ブータンへの募金等で約 9,500 万円が寄せられました。

全国の生協のユニセフ募金内訳(2011 年度・2010 年度)

募金種別		2011 年度	2010 年度
① 一般募金計		79,479,643	115,521,312
指定募金	ネパール女性と子どものための地域開発	23,424,710	14,402,301
	ラオス女の子と女性の立場向上	19,170,010	14,576,356
	モザンビーク栄養プログラム	18,684,430	16,348,892
	マラウイ教育支援プロジェクト	4,664,694	4,972,902
	モルディブ栄養と環境改善	10,306,118	6,672,972
	ブータン水と衛生	9,302,231	0
	アンゴラ教育	9,607,697	0
	ブルキナファソ衛生※	15,699	0
	マダガスカル水と衛生※	9,896	0
② 指定募金計		95,185,485	56,973,423
緊急募金	東日本大震災緊急	9,188,946	484,060
	ソマリア干ばつ緊急(アフリカ緊急募金を含む)	32,715,205	0
	アフリカ干ばつ緊急	1,388,998	0
	自然災害	1,035,736	20,166,061
	中東・北アフリカ	504,244	529,665
	アフガニスタン人道支援	1,818	3,950,673
	パキスタン人道支援	1,818	15,366,401
	ハイチ地震	50,593	57,658,785
	フィリピン台風	0	70,274
	スマトラ沖地震	0	186,677
	サモア地震津波	0	23,344
	人道危機緊急	0	1,250
③ 緊急募金計		44,887,358	98,437,190
総合計(①+②+③)		219,552,486	270,931,925

※ 生協だけでなく一般にも公開されている分野・地域指定募金です。

1983 年からの全国の生協のユニセフ募金額(単年度、累計)



※1983 年～1994 年までの募金種別内訳は不明

ぽむぽむ広場

編集後記

◆ 5 月のある朝、いつものように品川のホテルの敷地内にある、急な「いちよう坂」を登ってユニセフハウスに着くと、2 台のバスに分乗した中学生の一行と出会いました。子どもの兵士の存在や、辛い水くみがあることなど、いっぱい学習して、それから自分たちのことも考える機会となったでしょう。アフリカの干ばつの話は聞けたでしょうか。(浜崎)

◆ 英語は学生時代より大の苦手科目。でも時々、英語の方がわかるなあ〜と思うことがあります。例えば "Children First!"、訳すと「子ども最優先」です。

今号も「知っとこ。ユニセフ」では、「公平性に重点を置いた戦略」について取り上げています。ただこの言葉、どうしても説明が難しいです。英語では、"An Equity-Focused Approach" となりますが、何故かこちらの方がなじめる私の最近のお気に入りには "If Not Now, Then When? If Not Me, Then Who?" (「今でなくて、いつ? 私でなくて、誰がするの?」) (山本)

ユニセフ*コープネットワーク

ぽむぽむ通信

No. 56 2012 年 6 月 15 日発行

編集 **グループ ぽむ・ぽむ**

スタッフ・編集／相澤・尾澤・小池・谷杉・土橋・
浜崎・福本・藤森・松本・山本・
石尾・中村・中本

イラスト／蛸沢

発行 日本生協連 組合員活動部

〒150-8913

東京都渋谷区渋谷 3-29-8 ユー・ブ・ラザ 11F

TEL03-5778-8124 FAX03-5778-8125

ホームページ <http://jccu.coop/unicef/>

○ぽむぽむ通信第 56 号をお届けします。

今号では、アフリカで続いている深刻な干ばつを特集しました。また、「公平性に重点を置いたアプローチ」について成功例をご紹介しますほか、子どもたちの募金でできる支援をイラストで説明しています。2 月のネパール・スタディツアー参加者からの、中身の濃いレポートも、ぜひお読みください。

○全国の活動事例、ぽむぽむ通信の感想・ご意見をお待ちしております。

○次号は、2012 年 9 月 14 日発行予定です。